

MANGA

梶野ひなこ



今日の裏方 TODAY'S STAFF

1. 名前
2. 私のお仕事
3. 観客へのメッセージ



1. 玉田伸太郎
Shiuntaro Tamada

2. イベントの記録映像をつくっています。

3. スタッフそれぞれ個性派ぞろいなのでそちらも注目です！



1. 高橋幸世
Sachiyo Takahashi

2. 心をつなぐ通訳係

3. 人形は共通言語！国境超えて友達作ろう！（気軽に声かけてね）



1. 間部百合
Yuri Manabe

2. 人形劇の写真を撮っています

3. 人形劇とても面白いからたくさん見てくださいね！

明日のSIPF

10:00-11:00
朝ごはんトーク⑤
@ 下北沢アレイホール
タングラム・コレクティブとメンバーとドリュー・コルビーさんをお招きし、創作の背景や上演に込めた思いをお聞きます。

11:00-17:00
BONUS TRACK 冬市 × 下北沢国際人形劇祭
@ BONUS TRACK
下北沢の BONUS TRACK と下北沢国際人形劇祭のコラボレーション企画。SIPF 関連の展示やイベントも盛り沢山。第一回 SIPF の映像上演もあります。

11:00-11:45
『オブジェクトのコメディア・デラルテ』(子ども・親子回) @ 世田谷代田仁慈保育園 ピアッツア
前回の下北沢国際人形劇祭のオープニングをつとめたスロベニア人形劇界きっての天才、マティヤ・ソルツェの作品を、今年は無料で上演します。※中学生以下もしくは親子は、子ども一人につき2名までの同伴者が可能。(人数が多い場合は先着順となりますのでご了承ください)

14:30-14:50
ミハ・アルフ『シェフのミツィ』 @ BONUS TRACK GALLERY 2

16:00-16:55 & 20:00-20:55
『インペーター』&『危険な関係』(カンパニー・バケリット) @ スズナリ

BONUS TRACK 日程表

	2月21日(土)			2月22日(日)			2月23日(月・祝)			
11:00	広場/HOUSE	GALLERY 2	シモキタ園藝部こや	広場/HOUSE	GALLERY 2	GALLERY 1	世田谷代田仁慈保育園ピアッツア	広場/HOUSE	GALLERY 2	世田谷代田仁慈保育園ピアッツア
11:30	マーケット & SIPFキッチン	第1回下北沢国際人形劇祭アーカイブ展 SIPF DIGEST VIDEO 35分		マーケット & SIPFキッチン	第1回下北沢国際人形劇祭アーカイブ展 SIPF DIGEST VIDEO 35分		無料公演 マティア・ソルツェ 子ども・親子回 無料 40分	SIPFキッチン	第1回下北沢国際人形劇祭アーカイブ展 SIPF DIGEST VIDEO 35分	無料公演 マティア・ソルツェ 子ども・親子回 無料 40分
12:00		全編上映 A 『STICKMAN (棒人間)』 45分 12:10~12:55						小堀正樹 from インド富士子/ムンド不二 11:00~14:30	全編上映 E 『KAR』 50分 12:10~13:10	
12:30	シンケ from アマラブ 11:00~17:00	SIPF DIGEST VIDEO 35分	ワークショップ 工藤夏海『ナチュラ・プポ natural pupo 天然人形』 要予約 70分 13:00~14:10	シンケ from アマラブ 11:00~17:00		ワークショップ 工藤夏海『たごび』 参加無料 (カンパ歓迎) 予約不要 105分 13:00~14:45			SIPF DIGEST VIDEO 35分	
13:00					全編上映 C 『Kasperek and CO』 40分 13:30~14:10					無料公演 マティア・ソルツェ 子ども・親子回 無料 40分
14:00					SIPF DIGEST VIDEO 35分					無料公演 マティア・ソルツェ 子ども・親子回 無料 40分
14:30		パフォーマンス ミハ・アルフ 予約不要 20分 14:30~14:50								無料公演 マティア・ソルツェ 子ども・親子回 無料 40分
15:00		SIPF DIGEST VIDEO 35分	ワークショップ 工藤夏海『ナチュラ・プポ natural pupo 天然人形』 要予約 70分 15:00~16:10							無料公演 マティア・ソルツェ 子ども・親子回 無料 40分
15:30					全編上映 D 『進化恐怖症』 75分 15:30~16:45					無料公演 マティア・ソルツェ 子ども・親子回 無料 40分
16:00		全編上映 B 『犬の生活』 60分 16:00~17:00								無料公演 マティア・ソルツェ 子ども・親子回 無料 40分
16:30										無料公演 マティア・ソルツェ 子ども・親子回 無料 40分
17:00										無料公演 マティア・ソルツェ 子ども・親子回 無料 40分

第2回下北沢国際人形劇祭 2026 DAILY JOURNAL

DAY5
Saturday 21,
February,
2026



4日目のSIPFは、『KAZU』を上演してくださったカンパニー・サンジュ・ディーゼルのファン・ペレス・エスカラさんとヴァンサン・ルードーさんのお二人をお招きした「朝ごはんトーク」から始まりました。ファンさんの感動的なお話に、聞き手 & 通訳を務めた共同ディレクターの山口遥子さんが感極まる場面もあり、さらにトーク後には上演に使用されたパペットに触れる機会も設けられるなど、盛りだくさんの内容となりました。その後には「ガザの人形劇を支援する映像上映会」が行われ、多くの方がガザの現状に心を痛めていらっしゃる様子が印象的でした。そして本公演では、チェコ人形劇界をリードする名門人形劇団ドラク劇場による『白い牙』が上演されました。ジャック・ロンドンの長編小説を、ライブカメラを用いた臨場感あふれる60分の舞台作品へと凝縮した意欲作です。オオカミ役の俳優が操るカメラを通して、舞台後方に映し出されるオオカミの非人間的な視点の映像に、多くの観客が惹きつけられていました。さらに、本公演の間には「第四回 インターナショナル・パペットスラム」、夜公演後には『EXIT』を上演したフェケテ・セレクトレクと馬喰町バンドによる「LIVE & PARTY ナイト」が開催されました。まずは、NY市立大学演劇学部教授のクラウディア・オレンスティンさんによる寄稿をお読みください。

ドラク劇場の『白い牙』を観て、私はマーガレット・ウィリアムズが『The Routledge Companion to Puppetry and Material Performance』に掲載されている論文「The Death of "The Puppet" ?」で提起している議論を思い出しました。すなわち、人形劇とは特定の種類のオブジェを用いることによって定義されるのではなく、観客に無生物の素材の中からキャラクターや行為を読み取らせる、ある種の「見方」によって特徴づけられるのではないかと、という考えです。この作品では、この発想をさらに別の次元へと押し広げていました。物語の主人公であるオオカミは、母親を殺されて幼くして取り残され、その後、何人かの人間のもとで飼われます。そのうち二人は彼を虐待し、凶暴で攻撃的な獣へと変えてしまいましたが、三人目の人物は彼を大切に扱い、更生へと導きます。しかし、この狼は舞台上に人形や俳優として姿を現すことはありません。その存在は、舞台上部に投影されるライブ映像と音響によって示されます。カメラが捉えるのは、あくまでも狼の視点から見た世界なのです。舞台上では俳優たちが慌ただしく動き回り、狼が置かれるさまざまな状況を生み出すために装置や小道具を設営していきます。しかし、絶えず揺れ動く手持ちカメラの映像が映し出すのは、動物に認識可能な、ごく限られた世界の断片にすぎません。俳優たちは舞

台に土や石、水を配置し、母を失った子狼が食べ物や水、そして行方のわからない母を探し回る様子を映し出します。やがて舞台中央には大きなティビー（円錐形テント）が建てられます。そこは子狼を見つけたネイティブ・アメリカンの男性の住まいであり、彼は自分の犬たちとともに狼をテントの外で飼います。しかし犬たちは、仲間ではない狼を嫌悪し、排除します。舞台上には明確な空間構造が立ち上がっていますが、カメラが捉える狼の関心はただ食べ物に向けられています。犬たちに投げ与えられる鶏の脚や、人間が自分のために煮る豆に目を向け、それを食べようとして吐かれるのです。その後、俳優たちは大きな木製の囲いを組み立てます。そこでは怪しげな人物が狼を違法な闘犬に出場させ、金を稼ごうとします。観客は舞台上で囲い全体を見渡すことができますが、カメラが映し出すのは、狼が必死に体当たりし、脱出しようとする板張りの一部だけです。ティビーの場面でも闘犬の場面でも、他の犬たちは俳優によって演じられます。彼らはカメラに顔を近づけ、攻撃的で挑発的な表情を作ります。しかし、それは心理的リアリズムに基づく映画的な演技ではありません。カメラのフレームの中に特定のイメージを生み出すために、自らの顔を造形しているのです。言い換えれば、影絵人形を操るかのよう、自身をアニメートし、明な効果を投影しているのです。

闘犬の場面では、俳優たちが次々とカメラのフレームに現れ、互いに襲いかかる様子し出されます。そしてほんの数瞬後には、血まみれで動かなくなった姿として再びフレームに現れます。その効果はどこか滑稽であり、観客は犬の死そのものではなく、俳優とカメラが生み出す素早く切り替わるイメージの連鎖に笑います。

このように、素材をアニメーションすることによってイメージと物語を構築する手法（ここではカメラのフレーム内における俳優の顔）こそが、具体的な人形が登場しないにもかかわらず

ず、本作を一種の人形劇たらしめているのです。物語の終盤、虐待を受け続けてきた狼は、温かく快適な家庭に迎え入れられます。風呂に入れられ、ご褒美を与えられ、新しい服を着せられ、主人とともにソファに横たわってテレビを見ることもできます。この場面で、それまでカメラを操作し、物語の一部を語っていた俳優が、狼そのものを演じ始めます。

テレビに映る他の狼たちの姿を見て、彼は自らの野生の本性を思い出します。そして、快適な家が別のかたちの罠であることに気づき、真の自由を求めてそこを去る決意をします。

最後の場面は、事前に撮影された映像によって描かれます。狼を演じていた俳優が田舎道で通りかかった車を止め、ヒッチハイクで新たな未来へと向かうのです。狼の物語は、自らの自由を探し求める一人の人間の物語へと重なります。

さらに、本作で犬たちを俳優が演じてきたという事実は、初期の場面で示された「動物的」な特質が、実はきわめて人間的なものであることをも浮かび上がらせています。

クラウドピア・オレンスティン (NY 市立大学演劇学部教授)
《翻訳:三井武人(デイリージャーナル編集代表)》

メインプログラム MAIN PROGRAM

白い牙 Divadlo Drak



Drak theatre's White Fang made me think about Margaret Williams' s proposal, in her article "The Death of 'The Puppet' ?," published in The Routledge Companion to Puppetry and Material Performance, that perhaps puppetry is less defined by the use of specific kinds of objects than by a way of watching, one that invites the audience to read character and action in inanimate materials. White Fang played on this idea, taking it to another level. The main character of the show—a white wolf, abandoned as a cub when its mother is killed, and later kept by a series of humans, two of whom mistreat it, turning it into a brutal, aggressive beast, and a third who treats it well and rehabilitates it—does not appear as a figure at all in the show. Its presence is evoked instead by live feed video from a camera, projected above the stage, that shows the world from the wolf' s perspective, and sounds. The performers on stage rush around setting up the various scenes and elements that create the changing situa-

tions the wolf ends up in, but the camera and its constantly moving, shaky camera work, show only the limited aspect of that world apparent to the animal. The actors move the camera to dirt, rocks, and water, set up on the stage floor, to show the abandoned wolf cub searching for food, drink, and its missing mother. They build a full teepee center stage, home to the Native American man who finds the cub and keeps the wolf outside his tent along with his own pack of dogs. The dogs revile and ostracize the wolf for not being one of them. Despite the structure onstage, the wolf' s focus is solely on the food around him—the chicken legs thrown to the dogs and the beans the human cooks for himself—that others scold him for trying to eat. The actors set up a large wooden enclosure where the wolf is kept by a shady character who enters him in illegal dog fights to win money. We can see the full pen onstage, but the camera shows only a few rows of its planking as the dog bangs against these in trying to free itself from its

enclosure. Both at the teepee and in the dog fights, the other dogs are played by human actors who contort their faces into aggressive, taunting images as they come up close to the camera. Rather than performing in a familiar, psychologically realistic film acting style, they craft their faces to create specific images within the camera frame. In other words, they animate themselves, as one might animate a shadow puppet, to project a specific effect. During the dog fight, each actor appears momentarily in the camera frame, one after another, as the dogs go after each other, only to reappear in the frame just moments later lying immobile, covered in blood. The effect is comical and the audience laughs, not at the death of the dogs, but at the moves of the actors and camera to create these quick, changing, storytelling images. It is this kind of construction of image and story through animation of materials—here the faces of the actors in the camera frame—that makes this show, with no specific puppets, a kind of puppetry. In

パペットスラム

所狭しと並ぶ観客の期待に応えるようにパペットスラム

DAY2の幕があいた。物が持つ感覚を緻密でユーモラスに表現する司会者・ゼロコの見事なオープニングに続いて、物・人の可能性と柔軟に向き合うそれぞれの人形劇 / オブジェクトシアターが場をあたためていく。多彩なリアクションが十人十色の物語をうみ、普段背景と化している様々を突如魅了的な共演者とする前田斜め。対照的に物への極度の集中によってかえって人間性を仄めかす花形慎。1人の役者でも1人芝居にならないのが人形劇の面白いところだろうか。ユニットのシルヴブレや飛人集社劇団も、物と物、人と物、人と人、とバリエーション豊富な交流が眠っていた想像力を揺さぶり起こし、そんな飛躍ができるのかと共有の喜びを伝播させてくれる。言葉が不確かな昨年、オブジェクトを通したコミュニケーションは実に爽快だった。

最後に一つの事件を記録したい。菊池香帆の『カンムリワシが鳴いたから』について。どういうわけか彼女の笑顔が頭から離れない。オブジェクトシアターはこんなにも人間が立ち現れるものなのだ彼女から教わった。“個性的”の規格外である菊池は素直に澄んだ瞳で世界を観察し、咀嚼する。独自の感性は表現をとどめることをしらないようだ。観客はいつのまにか彼女に巻き込まれ、なにもかも初めて見るかのようにだったに違いない。どうか彼

女の明日もそのままでありませう、ひっそりと祈りをここに記したい。
岩佐美紀 (デイリージャーナル編集部)



絵:長友玉緒 (デイリージャーナル編集部)

ガザの人形劇を支援する映像上映会

3 Films about Mahdi Karira, a Puppeteer in Gaza より、
“We truly deserve life!”

鳥のさえずりが聞こえる。詩に合わせて、砂の形が変化する。光の板に描かれた瞳に小鳥が歌い、花がほころぶ。砂は次々に形を変えて、新たなイメージが作られていく。2023年10月、穏やかな風景は一変し、爆撃と破壊と死がガザを覆った。砂は、風が吹けばすぐかき消されてしまう。命と生活が失われていくガザの現状はたしかに、砂のように不確かだ。

本作は2025年8月、スロベニアのスネズニク城で行われたガザ支援のイベントにて上演された。キャサリン・ジニャックのサウンドアートが大きく城に投影され、ガザの人形遣いマフディ・カレラの語りガリアルタイムで届けられた。異なる地で同時に行われるパフォーマンスが、空間の隔たりを越えて観客に共有される。悲惨な現実に対して芸術ができることは多くない。脆さを抱えつつ、しかし、芸術を介して他者と出会い、私はあなたと共に在る、と示すことはできる。そうありたいと思う。

大澤萌 (デイリージャーナル編集部)



Live&Party ナイト

Day4の夜は下北沢 Club251 でパーティーナイトが行われました。熱気に包まれた会場は超満員！ドリンクを片手に、音楽に合わせて身体を揺らせ、語らうフェスティバル折り返しにふさわしい楽しいひと時となりました。

最初は、2日目『EXIT』を上演したスロベニア人形劇界の鬼才マティヤ・ソルツェ率いるブラハ発フェケテ・セレクトレク！コール・アンド・レスポンスに会場は大熱狂！そしてなんと初日公演『かもめ』を上演したカンパニー・チャイカのシモンがゲストとしてギターで登場！

トリ楽曲” We are going to die” は、シンプルな歌詞ながらも、古今東西、人間共通のテーマである「死」を扱っておりとても深い…。そしてなにより耳心地よいリズムで、誰もが口ずさみやすい！会場は大合唱に包まれ、まさに会場が一体となりました。続く馬喰町バンドも激アツ！謎の被り物をした武さんが会場後ろからひそひそと登場

プロジェクターに投影された映像とともに楽曲が進みます。日本の民謡をテーマにした、河童、狼 (Day4の演目『白い牙』にぴったり！)、春駒の曲も登場！利根川の河童伝説は日本人でも知らなかった人も多かったのではないのでしょうか。春駒では歌って踊って大いに盛り上がりました！

池田美月 (デイリージャーナル編集部)



絵:長友玉緒 (デイリージャーナル編集部)

the end, the wolf, who has been so badly mistreated, is taken into a warm, comfortable household, where he is given baths, treats, and new clothes, and can lie on a couch watching TV with his master. At this point, the actor who has been working the camera, and who has narrated sections of the story, begins to play the wolf himself. The wolf, seeing scenes of other wolves on television, is reminded of his own wild nature, and decides to leave the comfort of the house, which he discovers is another kind of trap, to find his true freedom. The final scene is played out through a pre-filmed video that shows the actor who had been playing the wolf hailing down a passing car on a country road and hitching a ride with it out to a new future. The story of the wolf has become the story of this human character searching for his own freedom. The fact that actors have played dogs throughout the show also reveals that the supposedly animalistic traits they



絵：梶野ひなこ（デイリージャーナル編集部）

displayed in earlier scenes are also all too human ones.

Cudia Orenstein (Professor of Theater at Hunter College and the Graduate Center, City University of New York)

アメリカの作家ジャック・ロンドンによる『白い牙』は、狼と犬の混血である「ホワイトファング」の目線から、強くなければ生存できないカナダ北西部ユーコンの厳しい自然、力が支配する犬の群れ社会及び人間社会を描いた。極寒の北部から太陽降り注ぐカリフォルニアへと至る長い旅路において、野生と文明、支配と信頼、人間と動物とを対比的に見せた作品である。面白いのは、この『白い牙』においては必ずしも「人間=文明」、「狼=野生」ではないということ。「ホワイトファング」は強くなければ生きていけない大自然に生まれたからこそ”狼”となり、対面した人間たちによる激しい暴力衝動の犠牲になってきたからこそ”狼”となった。時に人間は狼よりも”狼”でありうるし、人にしても狼にしても、育て環境がその人 / 動物の性質を形成すると

ということが語られるのである。原作終盤、人格形成過程において社会からひどい扱いを受けたスラム街出身の凶悪脱獄囚が登場するが、正に彼などは「人間の白い牙」とも言えよう存在であり、この狼の話がそのまま人間の話にも置き換えられることを端的に示している。

チェコの名門人形劇団「ドラク劇場」はこの物語にライブカメラの手法を持ち込んだ。人形遣いが手にしたのは人形ではなく、ハンディビデオカメラであったのだ。ビデオカメラの主観映像はそのまま狼の目線となつて、ステージ奥の巨大スクリーンに映される。日本のどこかから調達された本物の雪が、狼の生まれ育った環境として一面に広がる。犬そして狼を演じるのは人間の役者たちだ。特別なメイクを施しているわけではない生身の人間が唸り声を上げ、歯を

見せて威嚇するその姿は当初滑稽にも思われ、会場では笑いも起きていたが、それによって凄惨とも言える（自然の中では当たり前に行われる）命の奪い合いが直視できるものとなつて、次第に、狼を「よそ者」として排除する犬たちの姿が外国人を排除する現在の我々の姿と重なり、やがて自分より弱いものを暴力によって従わせる人間が獣にしか見えなくなる。

狼と犬とは 1 万年以上の時間をかけてゆっくり分岐したと考えられており、その遺伝子の 99% は一致しているようだ。「ホワイトファング」は自然の中で生きる狼と人間社会に生きる犬との境界に立って、その 1% の違いを行き来する。であればこそ、私たち人間社会が暴力に支配される今、1% ほどもない差によって別の道が開けるはずだと信じたくなるのだ。

目黒慎吾（デイリージャーナル編集部）



絵：長友玉緒（デイリージャーナル編集部）

水、岩、木々、煙、石鹸とお菓子のにおい、足音、声の響き。物が舞台上に存在し、人がそこにいて動いたり歌ったりすることは、こんなにもおもしろい。しばらく観ている内に、このパフォーマンスでは俳優がよく客席に背中を向けていることに気が付いた。ホワイト・ファンクの視点による映像が観客に対する説明を担う分、俳優たちは俳優同士の二者間、あるいはカメラを挟んだ三者間（俳優－カメラ－俳優）の関係をより強く作り上げることができる。私たち観客は、一方でホワイト・ファンクの視点をスクリーンで眺めながら、同時に狼と周囲の環境や彼が出会う人・犬とのやり取り（≒舞台上で行われていること）を外側から他者のように目撃する。よって、距離間の異なる二つの視線が、観客から舞台に向けられている。そのズレがおもしろく、どこかもどかしくもあったのだが、終盤、狼と主人のやり取りを眺めている内に、舞台に向けられる二つの視線があるということはないか、誠実なことだと思った。俳優と俳優の間に物（カメラ）が介在し、物を何か（ここではホワイト・ファンクの視点）に見立てて操り、ときに操られる（テクニカルの部分も含めて）関係性。スクリーンの映像は物（≒他者）からの視点であり、舞台を外から眺める観客の視線は、私たちが世界を眺める視線だ。両者は交わらない。他者の視点を介しても、私たちは決して他者自身にはなり得ない。しかし二つの視線を同時に並べてみると、その違いに気付くことはできるかもしれない。大澤萌（デイリージャーナル編集部）

大自然の中で生きる動物の姿は“人生は思い通りになるものだ”といかようにも勘違いする私たちに、授けられた生命力と自然への謙虚さを顧みさせてくれる。泥臭い男たちの情熱が主人公の狼ホワイト・ファンクを魅力的に出現させ、人と獣を縦横無尽に演じ分けながら、北国の荒野を表すオブジェクトにはじまり、ネイティブ・アメリカンの集落、闘技場、安住の地と、ホワイト・ファンクの大河ドラマを大胆かつ遊び心たっぷりに押し広げていく。狼の目線カメラは、舞台で使用される映像の可能性をもう一段拡張させ、表現として立派に観客を巻き込むことを成功させたようだ。その映像からは狼特有の躍動感以上に、ホワイト・ファンクが抱く恐怖や好奇心、孤独や愛への渴望が感じられる。同時に観客は、それらを表現する俳優を一部始終目撃する。秀逸さと滑稽さがフィギュアスケートのりくりゅうペアのように息を合わせて人間と動物の垣根を超えていく。命の躍動そのものがあった。岩佐美紀（デイリージャーナル編集部）

ジャック・ロンドンは苦手だった。中学校の英語の授業で”The Call of the Wild”を読んだ際、動物目線で進む中にも垣間見られる「動物はこう思っているだろう」という人間（作者）のエゴが気に入らなかった、主人公の犬の旅路に気持ちを添わせることができなかった、「自然／人間」という構造があまりにも安直で単純なものに思えたからだった。動物目線で書かれた小説を人形劇でどのように表現するのか全く想像ができなかったが、ドラク劇場による『白い牙』を観てジャック・ロンドンの作品が名作と言われる所以がよく分かった気がする。

舞台奥のスクリーンに主演ミラン・ハインが操作するライブカメラによる映像（オオカミ犬の目線で見えている世界）が投影され、上部に字幕が表示される。舞台上では演者が演技をするとともに、カメラ映像に写ることを想定したオブジェクトのセッティングが同時並行で行われるため、様々なモノが登場する。

観客はスクリーンに映るオオカミ犬の目を通じて物語を経験するとともに舞台上で起こっている出来事を観察する。緊迫する場面におけるオオカミ犬の心拍音、いなくなった母親の痕跡を辿る道中にある残滓（毛皮、尿、血、虫…）、犬たちが食べる肉のニオイ、歯から漏れ出る咀嚼中の肉ペースト、闘犬たちの怯え、不安、興奮…の表情など臨場感を持って示されるため、観客もうめき声は息を飲むような反応で迎える。

「人形劇」ではあるが、本作品では人形らしい人形は登場しない。だがモノの配置や人間の身体（表情、筋肉、歯や口、でっぴりと

魔法にかけられることの幸福がありました。生き物になりたい、その見ている世界をみてみたい、とおもうような時間。この作品における手持ちカメラの映像は狼の視線です。一匹の獣の視点が、クローズアップされた映像の中に様々なものを写していきます。生活は厳しく、恐怖に満ちた世界です。わたしたちはじぶんが狼になったかのように舞台において、そして、ときどき神の視点で人間たちの様々な動きをみます。人間として俯瞰して舞台をみると、起きていることはけっして滑稽なことではありません。獣は、獣らしい生を奪われているように感じます。獣は檻の中で闘犬をさせられます。檻に群がる人間たちは、とても残酷で嫌な感じです。しかし、獣が恐怖のなかで生き抜いていくときに見える世界は、ユーモアがあり、笑えます。次々と獣が殺されていくシーンで、わたしたちはとても場面を楽しみます。人形劇をみることは、魔法にかけられていくようなものです。この作品の魔法は、目の前で繰り広げられている残酷な出来事が、笑える楽しいシーンになってしまうことです。また、獣の視点では、犬た

したお腹…！）の見せ方で人形劇での手法をたしかに引き継いでいることを感じた。

オオカミ犬は最後には、自然界に戻ることを選ぶ。これまでオオカミ犬の目線で映っていたスクリーンにラストシーンで、オオカミ犬を演じ、カメラを操作していたミラン・ハインがヒッチハイクした車に乗り去る録画映像が流れる。これは常に挑戦し続ける（「飼い馴らされない」という彼らの姿勢の表れなのかもしれない）。

池田美月（デイリージャーナル編集部）

『白い牙』の公演をご覧になったお客様から、「あの雪、本物っぽかったけど（まさかね）」「随分リアルだったけど、素材は何だろう」といった声もありましたが、あの雪は（人工ですが）本物です！「雪を分けていただきたいんですが……」という謎の電話に戸惑う、狭山スキー場の担当の方を説得し、雪が溶けないようクーラーボックスに入れて運搬してくださる方を手配するなど、3か月前から地道に準備してきました。本番当日の正午過ぎに劇場で雪の到着を見届けはしたものの、同時時間帯にCLUB251で開催されたペットスラムの準備と後片付けに追われ、『白い牙』の本番に立ち会えず、舞台上で使われた雪を目にすることはできませんでした。無念…痛恨の極みです。私の涙の供養に、これだけはどうしてもお伝えしたく、寄稿いたしました。SIPFも残りわずかとなりましたが、引き続き（たまには裏方の奮闘も想像していただきながら）公演をお楽しみください！河内哲二郎（テクニカルディレクター）

ち（俳優たち）が肉を食らうそれだけでも、観客を笑いに誘います。ささやかだけど起こる出来事にたいして、観客を集中させることによって、こうした魔法をさく裂させています。わたしたちは、獣と同じように世界をみながら、たまに自分たちが人間であることを思い出したりして、作品が進んでいきます。そして、獣は人間のもので安らかな生活を送るかと思われた矢先、テレビに映された狼の姿をきっかけに、じぶんが戻るべき場所へと去ってゆきます。その選択をした獣の映像は、人間が大きな車に乗って去っていくという映像です。わたしたちにとっては、狼でしかないその人が画面の奥の方へと去ってゆくとき、それはただ人間が車に乗って去っていくだけなのだけれど、不思議な感じがします。すべての魔法が解けてしまう瞬間、という感じが。

森田諒一（デイリージャーナル編集部）